



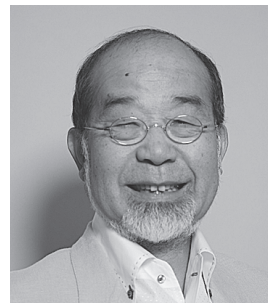
特別講演 4

SL4

生きているってすばらしい — 医療と薬と命 —

かまた みのる
鎌田 實

諏訪中央病院 名誉院長



人間が生きていくうえで、医療はとても大切なものだ。しかし、政治家たちはそうは思わなかった。2002～2006年までの3回の医療費の改定で、6.9%の医療費が抑制された。社会保障費2200億円も毎年削減された。ダブルパンチを受けた。医療崩壊が起こりはじめた。

新政権になって社会保障費の抑制は止まった。10年ぶりに、0.19%の診療報酬の引き上げがなされた。わずかだが、風が変わった。しかし、救急医療や産婦人科医療、小児科医療を崩壊させないために、0.19%のアップでは支えることができない。そのために、約4000億円の薬価の切り下げが行われた。薬を作る人たちにとっては、大変なことだろうと思う。

貿易立国として、経済の強い国であり続けなければならない。本来の日本の技術力からすれば、創薬や医療機器を作ることは日本の得意分野のはずなのに、この10年ほどの間に企業は力を失いだしている。経済を立て直すためにも、もう少し医療にお金をかけ、製薬会社をたたきすぎないことだ。その代わり企業は雇用を拡大して、社会的責任にこたえるべき。

医療がよくなれば、国民は安心できる。1400兆円という、一人当たりの貯金を世界一持っているという国民が、医療がよくなって、老後も心配なくなれば、貯金を使うようになる。すると、日本の経済は復活しはじめる。

医療にお金をかけるのは、ドブにお金を捨てることではなく、むしろ、資本主義のお金を回転させるうえで、実に大事な起点になる。政府はもっと自信をもって医療にお金をかけていいと思う。

20年ほど前から、チェルノブイリの病気の子どもたちの支援をしてきた。チェルノブイリ原子力発電所の爆発で、放射能の汚染地域のたくさんの子どもたちが病気になった。その子どもたちを救うために、約14億円の医薬品を送ってきた。6年前からは、イラクの4つの小児病院に支援をしてきた。6年間で送った医薬品は、約2億4000万円分になる。

子どもたちを救うためには薬が必要である。その薬を運ぶ車が、テロリストによって破壊されたことがある。命がけで薬を運んでいるのだ。薬がなければ、医療はなかなか成り立たない。薬は医療の根幹だ。その薬を通して、ほくたち医療人は病気の人たちを治したり、支えたりするのだ。医療と薬と命について、熱く語ろうと思う。

略歴

医師・作家。1948年東京生まれ。東京医科歯科大学医学部卒業。36年間、医師として地域医療に携わり、そのかたわら、チェルノブイリ救援活動、イラクへの医療支援にも取り組む。1991年より18年間、ベラルーシ共和国の放射能汚染地帯へ91回の医師団を派遣し、約14億円の医薬品を支援（JCF）。2004年にはイラク支援を開始し、イラクの4つの小児病院へ毎月300万円の薬を送り、難民キャンプでの診察等を実践している（JIM-NET）。2009年ベスト・ファーザー・イエローリボン賞（学術・文化部門）受賞。ベストセラー「がんばらない」をはじめ、最新刊「空気は読まない」「よくばらない」「ウェットな資本主義」など著書多数。日本テレビ情報番組「news every.」に毎週木曜レギュラー出演中。